

如是観

一、ソクラテスの弟子

「我が師、ソクラテス以上の智者があれば知らしめたまえ。」とソクラテスの弟子がデルハイの神様に祈りました。神様の御託宣は、「ソクラテスが世界一の智者である。」とのことでした。然るに、ソクラテスは常に自らを愚者だ。何もわからぬ男だと思つています。各方面に出て、いわゆる智者と意見をたたかわすに一度だつて敗けたことがない。それなのに、ソクラテスは愚者だと思つています。弟子は考えました。そして

「神は、自ら愚者と自覚せる人を唯一の智者とせられたのであるわい。」と覚りました。

二、愚者

今の時代にはこの愚者を容易に見出させませぬ。大概是、自称、智者であり、賢人であり、善人であります。物のわかた人がそろつています。ほんとに道を求めに出かけた人は何時も「無智の処女地」に立っています。わからぬから求めます。進みます。愚者であると自覚した者は、自分を偽ることを一番きらいます。自らを偽る人は真の幸福から遠ざかります。

三、真の幸福

ソクラテスは「掛け値のない生活が一番幸福だ」と言つたそうです。単純な真理であります。簡単でも短くても真理は真理だから仕方がありません。金がないのにある風をしたり、地位や名誉をこと更に張りたい人は常にこの真理を反古にして苦しんでいます。掛け値をつけるのは商人ばかりではないのです。掛け値があるほど、人が卑しく見えて来ます。倫理じゃの、哲学だのと、むずかしいことに骨折つてもこうした世界がわからぬ人は、救われるには遠いのです。

四、信ずる心

信じられようとはするが、信じようとはせぬ。尊ばれようとはするが、尊ぼうとはせない。信じられることよりは、信ずることが困難である。尊ばれることよりは尊ぶことが困難である。信じられる者よりは、信ずる人の方が尊い。信じていた時、信じた者が裏切つても、それは、裏切つた者の価値が下つたので、信じた者はやはり尊い。

五、実質と価値

人は資質以上に価値を見せようとする。そこで金箔をつける。金箔は一日保つ、十日はげぬ。時には数年もてる。しかし時には一日してはげる。十日で光がうすれ、一年で素地が出る。その時には、実質以下に価値が下る。

生きていくという事は、価値を世間から見てもらうためではない。価値を高く認めてくれるように努力するために生きていくのではなくて、実質そのものを高めるた

めである。世間が何と見ようとも、実質そのものを高め、実質そのものの光を増すが向上であるならば、実質が下つて行くか、光がうすれる時、墮落という。

墮落する人間が、自分の上に金箔をつけて、価値だけを高く見てくれるようにする。それを偽善という。偽善は墮落者につきものである。

六、道徳と信仰

鉄はほつておけば腐る。だから磨かねばならぬ。磨くと光が出る。鍬は鍬でみがき、釜は釜で、鉄瓶は鉄瓶で、刀は刀で磨かねばならぬ。それが道徳である。

しかし磨いても磨いても軟鉄は軟鉄で、鋼でも磁石でもない。もし軟鉄を火中に入れて焼き、急に冷せば鋼となる。軟鉄を磁石棒ですつてやれば磁石になる。人も強い智慧光に照らされて、一度全否定のどん底に立つて来ると真実の信仰が出来る。信仰は質の変化である。

七、そのままの中に

小役人である者は、小役人であることに失望し、百姓は百姓であることを悲しみ、教員は教員であることを灰色に思う。そして、百姓は商人に、商人は官吏に、官吏は政治家にそれぞれ変わりたいと思う。変わつてもいいが、然し、真に小使いに生ききつて、そこにほんとの天地を見出せば、悪政治をして天下に恥をのこす大臣よりも、一向流行らないで悲観している医者よりも、輝いたものであり、真の幸福のあることを知っていたい。職業に高下のないくらしいのことは今更言わなくてもいいが、職業によつて幸、不幸がわかるものではない。

八、

生れつき短気な人には、腹のよく立つのが悪い変わりに、さつぱりとしたよいところがある。おちついた人は、のろみであるかも知れないが、やつたことに無駄がない。腹が立つのを苦にするより、さつぱりした所を生かして使い、のろみであることを叱らずに、やつたことが確実であることをほめ、口数の多いのを殺さずに、その口をよいことを伝えるために生かして行つたら、天下に何一つたりものはない。それが全ての生きる道である。悪い方を見て棄てたら良い方もなくなる。万物ことごとく良い方面と悪い方面を持っている。如来の慈悲の不可思議なるお救いをいまさらおどろく。悪に強い者が救われて善に強い人になる。

九、病根 その一

自分ほど賢い者はいない。自分のしたことほど正しいことはない。自分には一点のまちがいないと思つている者がある。こんな人を我の強い人だという。こうした人には進歩も発展もあり得ない。口を開けば自慢であり、自己吹聴である。何時の程にか世人から嫌がられる。

十、その二

家内の悪い家がある。「御免なさい」と入って見る。御挨拶に出た主婦さんのお顔を一目見ると、陰険な高慢ちきな風が見える。人の忠告も意見も全部しりぞけて、人が褒めると高慢得意になり、人が忠告がましいことを言ったり、そのやりかたを批難すれば真赤になって腹を立てる型の女である。家庭の面白くない病根はここにある。

十一、その三

息子の嫁を五度も六度も取り替えさす母親がある。そうした姑ほど、嫁の悪口を外に出て言うものである。そうした女ほど子供には孝行を強いる。親不孝者の出来る病根である。

十二、その四

甘い料理の出来た時、一口「おいしいなあ」といい得ぬ夫の家では、奥様の顔の晴れる時がなく、その料理は段々下手になる。

十三、その五

自分の子供をでも、弟妹をでも、妻をでも、頭から「馬鹿」と叱りとばす男がいる。お言葉通り子供も妻も馬鹿になる。学校の教師と児童との間でもそうである。

十四、その六

此方の悪事、欠点、秘密を彼方に、彼方の短所、失策、秘密を此方にと、移さねば気がすまぬ女がいる。その地方での邪魔者扱いである。こうした娘が嫁入るときつと離縁になる。

十五、その七

何かの集合で集ればすぐ酒を飲む風習の村がある。こんな村ではいわゆる有志なる者を教化することは不可能である。何会がその村に生れようと、如何なる名士が乗り込まうと青年団があれば聞いたらよいとか、婦人会員によいお話だとか、人をおさめようとする者ばかりで村の文化の進む心配はない。

十六、その八

財産貯蓄競争の大変激しい村落がある。宴合の席次争いのきびしい村がある。そうした村には争い事のたえることはない。

十七、その九

選りに選って妻を娶ろうとする男がある。美しいのを鼻にかけて、随分と理想の高い女がある。こうした者たちのうちに一番、格別悪い夫をもつたり、醜い妻を待った者が多い。それで満足が出来れば結構だが、一年不平のうちに暮しているのが多い。

十八、その十

一攫千金という。一鍬おこしを考え、働かずして金を儲けることを知った男の惨めな有様をあまりに多く見せつけられる。派手に金を集めた者は、不真面目に金を使う。この頃のような不景気時代はこうした人への鉄槌である。

十九、道は近い

ある寺院（それも相当新しいと言われる人の集る寺院）へ講演に行つて、二度私の下駄を盗まれた。道を求めに來たのであろうか。遊びに來たのであろうか。講演先きで、雄誌や書物を出して、勝手に取らして、勝手に代償を支拂ってもらうと、半數も金が集らぬことがある。私は寂しい思いがする。道は遠いところにはない。寺院は、極樂参りの切符を安売りする所ではない。悪人を救う道場である。

二十、

自分という者をちつとも知らないで、信仰沙汰をしたり、議論をしたりする世界には、もう飽いでもしました。心の眼が開いて、自分をほんとうに知る道に出た者は、最後に何もいう言葉を有しませぬ。自分を知りつくした者が、心から信ずることの出来る先覚者の前に出た時、その一言二行はその人を育てあげる生きた金言となつて響きます。